



櫻園通信 6. 平成 25 年 10 月

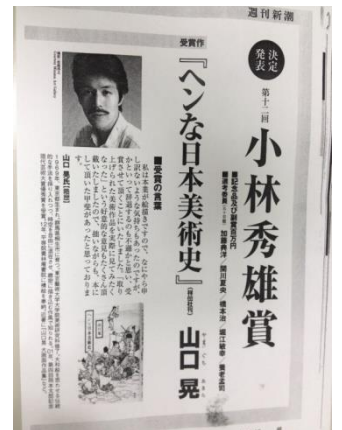
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



★ 養育院幾星霜之圖 ・ 山口晃

東京都健康長寿医療センターは、本年 6 月、リニューアルオープンした。その玄関ホールに、山口晃の近作、【養育院幾星霜之圖】が飾られている。本郷→神田→本所→大塚→板橋と移転を繰り返した養育院の歴史をたどるとともに、現代の病院をユーモラスに描いている。鳥羽僧正の鳥獸戯画と洛中洛外図屏風を現代風にアレンジしたような絵図で、今売れっ子の若手、山口晃 <http://ja.m.wikipedia.org/wiki/> の手になる。彼は上野の東京芸大美術学部卒業であるが、この場所は、明治六年二月、上野の護国院の一部を買い取って、養育院の恒久施設が建てられた所である。しかし、幕末・明治のオランダ医、ボードウインが、この一帯は公園や博物館に適していると言ったため、既に出ていた養育院は明治十二年に神田に追いやられ、立地予定の東大は本郷に行き、公園、博物館、学校などになった。明治二十二年に、養育院の跡地は東京美術学校となっている。彼は、絵をかきながらこのことに気付いた様で、(いまの芸大あたり。建て増したりしたが、博物館用地にするため追い出された)と絵の中に書きこんでいる。

その山口が平成 25 年度の小林秀雄賞を受賞した。優秀評論を対象とする賞であるが、著者の日本美術史に関する初評論が受賞対象となった。題して【ヘンな日本美術史】。早速購入して読んでみた。鳥獸戯画の 4 層構造。雪舟の画家としての冒険。洛中洛外図屏風の空間処理などについて、斬新な見解を述べている。最終章に、「やがて悲しき明治画壇」と小題を付けて、いわゆる近代日本美術史に登場する画家は割愛して、明治初期の画家、川鍋暁斎、月岡芳年、川村清雄を取り上げている。川村清雄は「最初期の洋行帰りの画家としてのみ取り扱われているのを惜しんで、その画業について述べている。



まったく偶然のことであるが、この川村清雄が書いた「大久保一翁」の油絵肖像画の写真を、センター2階の、「養育院・渋沢記念コーナー」に掲げており、その奇縁に驚いた。



このコーナーの準備に、養育院の黎明期のことを勉強していて、いくつかのことに気付いた。そのひとつは、養育院の成立に、大久保一翁が深く関与しているらしいことである。その調査のために、数年前にご子孫の大久保家を訪れたことがある。その際、玄関先で私を出迎えてくれたのが、この、日本における最初期の油彩肖像画であった。その時の思いもあってこの原稿を書いている。この画家は、日本で最も早い時期に欧米に留学し、西洋画を修得した人である。元は幕臣の旗本で、明治元年に徳川家と共に静岡に移住、明治四年に徳川家の給付生として渡米、大久保一翁の助言もあり、その後パリ、ベネチアで十年間西洋画を学んだ。この間、大久保一翁や勝海舟の子息、徳川家達らと交流している。帰国後は、大久保一翁、勝海舟の援助で画家として活躍した。

大久保一翁は、江戸幕末期に目付海防掛~蕃書調所総裁の時、七分積金による西洋版小石川養生所の創設を提案している。しかし、幕末期のごたごたで実現化せず、明治五年に東京府知事になって実現したのが養育院と東京府病院である。その歴史が【養育院記念コーナー】の展示パネルになっている。その川村清雄の作品群の中に、大久保一翁にたいしての感謝を込めた肖像画があるが、その写真が二階の【養育院・渋沢記念コーナー】に掲げているものである。大久保一翁の肖像画は、川村清雄による日本で最も早い時期の油絵の肖像画である。一翁の子孫の家にある実物の写真をお許しを得て展示している。なお、慶応大学北里講堂に掲げられている福沢諭吉像も川村清雄による。一翁は福沢諭吉の慶応義塾用地の確保に協力しており、そのお礼の手紙の存在が知られている。養育院に絡む妙なご縁に驚いている。(文責: 稲松)



【参考】 山口晃の作品群:

今様遊楽圖(2000年)、何かを造ル圖(2001年)、胎内巡り圖(2004年)、歌謡ショウ圖(2004年)、東京圖 奨墮不樂乃段(2001年)、東京圖 六本木屋圖(2002年)、階段遊楽圖(2002年)、百貨店圖 日本橋三越(2004年)、東京圖 芝の大塔(2005年)、成田国際空港 飛行機百珍圖(2005年)、ラグランジュポイント(2006年)、四季休息圖(2007年)、渡海文殊(2007年)、Tokio 山水(2012年)